

---

# あなたへの手紙

神藤聡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あなたへの手紙

### 【Nコード】

N4723D

### 【作者名】

神藤聡

### 【あらすじ】

あなたとの過去を振り返る手紙です。

最後に好きだと言ってくれたのは、それほど前のことではなかったと思う。でも私はたぶんそのときもお茶を濁して、そうして結局あなたの元へは戻らなかった。

私は、あなたをとて傷つけることをしてしまったことに、ずいぶん経ってから気が付きました。

あなたが、「あいつだけはやめてほしい」と言った人と、今生活を共にし、娘も生まれました。そのことは、おそらくきつとすでに耳に入っていることでしょう。

あなたと初めて出会ってから、もう10年近く経ちますね。

私達はすぐに恋に落ちたけれど、その恋はわずか4ヶ月足らずで破綻してしまった。

というよりも、終わらせてしまったのは私の方です。若かった私は、あなたとの恋にすぐに飽きてしまいました。

今思えば、我ながら恋と呼ぶにはなんて上っ面だけの、浅はかな関係で満足してしまったことでしょう。

あるいはだからこそ飽きてしまったのだとも思っています。

あなたと言う人を、理解しようだとか受け入れようだとか、そんなことが出来る器でもなかった。今でもその器があるとはとても言い難いけれど。

10年前、私は、あなたなら理解してくれるのじゃないかと、それまで誰にも言えなかった秘密を打ち明けました。

その秘密とは、あなたと付き合い少し前に、1年ほどお付き合いした人のことです。

また付き合いたいとか思うわけではないけれど、未練がないと言える自信がない、と、そんなようなことを私は、よりによってあなた

に話しました。

あなたはなんでもないことのように聞いてくれた。いや、少なくとも表面上はそうしていてくれました。

しかしその後、あなたは私に一通のメールをくれました。

以前、片思いしていた人のことを忘れていない。でも、忘れられそうな気がするからキミと付き合っている。

そんな内容だった気がします。

同じことをしている、と私はショックを受けました。私たちは互いに別々な人のことを思いながら一緒にいたのです。

そうして、私があなたに打ち明けた事が、あなたにとってもどれだけ苦しいことだったのかと思い知りました。

それが、付き合って1ヶ月も経った頃のこと。

それからの3ヶ月はよく覚えていないのです。

ただ、週に一度以上は会っていたし、それなりに楽しかったような気がします。

ただ、どんな思い出も、私の中にとどまっていないのです。

ある日突然、私は他に好きな人が出来ました。

出来ました、というよりも作りましたと言う方が正しいかもしれません。

あなたと別れるしかない状況を作り出すことで、私はあなたから逃げました。

別れたい、と言ったとき、あなたは電話の向こうで泣いているようでした。

でも、最終的には、わかった、と言ってくれました。

あのとき、他に好きな人ができたと言う理由がなければ、私はあなたと別れることが出来なかったと思います。

それはなぜなのか、今になってようやく、それをあなたに伝えることができるような気がした。そうしてこれを、書いているわけです。

でも、きつとあなたには届かないでしょう。

本当は、あなたといえるのはとても楽しかったし、私にとってあなたに合わせることはそれほど苦ではなかった。

あなたは優しくかったので、私が合わせていることにさえ気が付いて、気遣ってくれることもあった。

一緒にいるのが楽しかったということが、なぜ悪いのか？

私はその何ヶ月か、何度か自問自答しました。

確かにあなたはどちらかというと出不精で、二人で過ごすと言っても自宅ゲームをしたり漫画を読んだりする位のものでした。

二人ともお金がなかったので、出かけると行ったらカラオケや外食程度のもので、デートらしいデートもしませんでした。

そういえば一度、しし座流星群を見ると言って、夜中に私を呼び出しましたね。

当時実家に住んでいた私は、どきどきしながら忍び足で部屋を出て、マンションの下に停めたあなたの車に駆け込みました。

あなたはめったに怒らなかつたし優しくかつたけれど、すごく頑固なところもあつて、自分の意見は決して曲げなかつたし、またたまに怒ると口をつむいでしまう面倒なところもありました。

そういつた不満は確かにありましたけれど、そんな細かい取るに足らないことが問題なのではないと、私はずっと感じていました。

心のどこかで、あなたのくれたあのメールが、記憶の沼に沈んでしまわずに、何かに引つかかっていたままだったので。

嫉妬だったのかもしれない。

確かに、あなたの忘れられない人が、一体どんな人だったのかとても気になったりもしました。

けれど私は、同じことをあなたに言ったのです。

あなたが私と同じように、私の忘れられない人のことを想い、嫉妬するのだとしたらとてもいたたまれない。

あるいはしかし、この苦しみはいわゆる自業自得だとも思いました。だからこそあなたからのメールのことを、私はあなたと別れるときに一言も口にしませんでした。

でも確かに、あのメールのときから、いや、私があなたに秘密を打ち明けたときから、私はあなたとの別れを決めていたような気がします。

あなたと、恋人同士としての関係は4ヶ月くらいだったけれど、その後の5年もの間、あなたは私の友人でいてくれました。

学生であるうちも、時々時間を見つけては、ネット上で話をしたりする関係でしたね。さすがに二人きりで会ったりすることは無かったけれど。

でも、ひょんなことから、あなたは私が入社した一年後、後輩として私の勤める会社に入社しました。

偶然かあるいは必然か、部署も同じになりました。

私は、久しぶりに会ったあなたを見て、とても懐かしい気持ちになりましたし、知っている人が近くにいてくれて、安心する気持ちもありました。

先輩と言う立場は少し不思議な感じもしたけれど、たまには食事をしたり、恋の相談に乗ったり、あなたが私を友人として受け入れてくれることに、私はすっかり甘えていました。

そんな関係でずっといられるのだと思っていました。今思えば、ずいぶん都合の良い思いだったと感じます。

入社3年目の頃、私は当時お付き合いしていた人に、ある日突然別れを告げられました。

別れと言うほどはつきりした言葉ではありませんでしたが、その人は、気になる人がいるから私との間に距離を置きたい、と言いました。

私は泣く泣くそれを飲み込み、きつとこれがその人との別れとなる

に違いない、と思いました。

私にとっては、それは別れるに匹敵する状況だったのです。

一度他の人に移ってしまっただ心は、もう二度と元に戻らないのではないか。

私はそう思い、その人との別れをすっかり覚悟していました。

とにかく、泣きながら帰宅した後、私はありとあらゆる友人にメールをしました。寂しさを紛らわすために。ただそれだけのためです。もちろんその中にあなたへのメールも含まれていました。

数日後、私たちは居酒屋でお酒を飲みました。

私はあなたに話を聞いてもらって、少し楽になったような気がしました。もちろん他のたくさんの友人が私の話を聞いてくれましたし、あなたのそのうちの1人でした。

私は、こんなにたくさんのお話を聞いてくれる友人がいるのだから、失恋したことがくらいなんてことはないじゃないか、とさえ思えるような気がしました。

ただそれは、少しやけっぱちになっているところもあったかもしれません。

数日後、私はあなたが1人暮らしをするマンションのあなたの部屋で、あなたと二人でベッドの上に座っていました。

その日のことは、あなたの部屋の匂いを今でも思い出せるくらい、鮮明に記憶に残っているのです。

あなたの匂いは、5年という時間を隔てても、あるいは場所を変えても、余り変わらないようでした。私はとても懐かしい気持ちになりました。

そのときあなたは私に、本当はずっと忘れられなかったんだと言いました。今も好きだと。

私はあなたのその言葉に驚きを隠せませんでした。

あなたは私に、他の女との恋の相談をしたりもしていたのです。もう過去のことだと思っていた、と私は言いました。

確かに他の女の子と付き合ったりもしたけど、でもいつもキミと比べてた、と彼は言いました。

私はそのとき、10年前にあなたがくれたメールを思い出しました。忘れられないのは、一体誰のことだったのだろうと。

もしかしたら、私は騙されているのかもしれない、と今でも思うことがあります。

その場の雰囲気、5年前のことが懐かしくなってしまうって、彼は私に好きだと言ってしまったのかもしれない。

男にフラれた直後で、弱っている私なら簡単に落ちると思ったのかもしれない。

もしそうだったとしたら、私自身、どんなに楽なことでしょう。あなたへの自責の念に駆られることもないのに。

だけれども、それから数ヶ月、縁あってあなたの友人でもあった人と、私は付き合うことにしました。

その話をしてから、あなたは私に連絡してこなくなりました。

同じ会社なのに、会うこともありません。

一度すれ違ったこともあるようだけど、私は気づくことが出来ずに、振り返るとあなたはもう見えなくなってしまうていました。

私はあなたと連絡が取れなくなってしまったから、あなたの本当の思いを知りました。

夫と付き合うことになったとき、あなたは、キミたちはお似合いだよ、とも言いました。

彼だけはやめて欲しい、と言いながらも、そんな風にあなたが言ったので、私はあなたの真意を汲み取れずに、ありがとう、とだけ言って電話を切りました。

結婚したことも子供が産まれたことも、あなたはたぶん知っている



のだろうと思います。

だからこそあなたは私との関係を絶った。

あなたはそういう優しい人だったのだと、私は今になって思い出すのです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4723d/>

---

あなたへの手紙

2010年10月11日00時09分発行